



『大石内蔵助義雄切腹之図』より。吉良邸討ち入りを指導した大石良雄らの切腹は、細川越中守綱利の屋敷の庭で執り行われた（兵庫県立歴史博物館所蔵）

(1732)、義央の弟・東条とうじょう義叔よむすえが興した東条家が吉良姓への復姓を願い出ると幕府に許され、吉良家は再興されている。吉良家の高家旗本の家格は吉良家の分流・蒔田まいた家が継ぎ、こちらも吉良姓に復姓したのち幕末まで続いた。そして赤穂事件後、もつとも悲惨な日々を送ったのは、討ち入りに加わらなかった旧赤穂藩士たちだった。当初、討ち入りの同盟者は120余名いたがその後脱盟が続き、江戸入りした

て遠島」という厳刑である。四十七士の遺児19人のうち、15歳以上の4名が実際に伊豆大島に流罪となり、15歳以下の者は親類預けとなった。ただ、流刑者では唯一、間瀬ませ定八さだはちが20歳で病死したが、他3名は宝永3年(1706)に赦免されている。また、「妻と女子、及び僧籍にある男子は免罪」とされたため、大石良雄おおいしよお(内蔵助くらのすけ)の次男・吉之進きちのなどが仏門に入れられた。

一方、討ち入られた側の吉良家は、取り潰されている。討ち入り当時、吉良家の当主は義央の養子(孫)の義周よじちかだったが、父・義央を守りきれなかったことは武士の恥とされ、領地召し上げのうえ信濃高遠藩主諏訪安芸守すわあきのかみへのお預けに処されたのである。そこでは、四六時中監視され、寒くても火鉢さえあてがわれない罪人同様の生活が待っていた。生来病弱だった義周はその辛い日々耐えられず、幽閉から3年目に病に倒れると、21歳で病没した。

ここに鎌倉以来続いた吉良家は断絶したが、下って享保17年

吉良義央
(1641~1703)
父・義冬の遺領を継ぎ、三河吉良4000石を領した。吉良家は足利将軍一族の名門で、高家肝煎などを務めた。知行地では新田開発や築堤を行い、文化財を寄進するなど名君と謳われたという。

大石良雄
(1659~1703)
通称内蔵助。大石家は代々播磨赤穂藩で家老職を務め、良雄も21歳で筆頭家老に就いた。浅野長矩が殿中刃傷事件に及び即日切腹、浅野家取りつぶしの命を受けると、赤穂から京都山科に隠遁。同家再興を幕府に嘆願したが容れられず、吉良邸討ち入りを決意した。